大学研究室では今…

建築学部を開設します

吉田倬郎

工学院大学は、2011 年 4 月に日本初の建築学部を開設します。これは、この 6 月末日の文部科学省の HP で開設に必要な書類などの受理が報じられ、以後、公に広報できるようになったのです。それまで、学内での様々な手続きを経つつ内容を充実させ、ある段階から文部科学省の指導をいただき、建築学部構想としてほぼ形が整った段階でおそるおそる (構想中) という但し書き付きで広報活動を開始し、文部科学省に書類を提出した後に新年度早々 (申請中) という但し書き付きで HP に載せる、という過程を経て、文部科学省の HP で報じられたことによって、来春の入試関係書類などにも建築学部開設が記載できるようになり、工学院大学建築学部の開設が未来完了形で確定した次第です。

日本では、大学における建築教育は、現在の工学院大学もそうですが、主に工学部系の建築関係学科で行われ、このほか芸術系の学部や家政系の学部にも建築教育を行う学科が設けられていますが、現在建築学部はありません。

海外に目を向けると、欧米では建築家や都市計画者などの教育を担う学部が建築学部であることは、よく知られています。日本の大学における建築教育との大きな違いは、構造、設備、生産などの技術者を育てる教育は行っていないことです。欧米では、建築家には、医師や弁護士に並ぶ確立されたプロフェッションとして、社会的に高い地位があります。

工学院大学が開設する建築学部は、このような欧米型の建築学部ではありません。工学院大学の建築系のこれまでの実績は、これからも継承発展させるべきものであることはいうまでもないことです。一方、現在のような工学部の中にある建築教育を取り巻く状況には厳しいものがあり、その打開は重要な課題です。入学者の確保の面では、少子高齢化の進行と受験生の理工系離れがボディブローのように各大学の理工系学部を痛めています。受験生の理工系離れについては、近年の経済事情の影響で改善の兆しが見えますが、少子高齢化の進行は当分改善されそうにありません。建築を学んだ若者を受け入れる建築界も、姉歯問題とリーマンショックのダブルパンチを受けて、厳しい状況が続いています。こうした状況の打開策としても、建築学部の開設への期待は大きいのです。

工学院大学が現在設置している建築系学科の教育内容には、計画、デザイン、歴史など、工学というよりは、社会学、芸術、文学のほうが座りがよい内容を含んでおり、一方では工学をベースとする技術教育があり、卒業生は、設計、施工、行政、住宅など、幅広い分野に出ていきます。工学部の中にありながら、工学部的でない面を多く持っている教育を展開してきているのは、建築の外からは、しばしば奇異にみえるようです。こうした事情は、日本の大学における建築教育に共通しており、建築家と建築技術者を一緒に教育するという、日本の建築教育の特徴でもあります。工学院大学が創設する建築学部も、こうした建築教育を基本的には継承しています。

それでは、工学部から離れ建築学部になると何が変わるのでしょうか。これは、日本だけでなく海外に目を向けても、先例はありません。一般的な蓋然性に頼ることができない、工学院大学の建築系としての、決断と実行が問われる問題です。そして、実現には、学内の理解と支援、公的な制度などへの適合が求められます。

重要な課題のひとつは、入学生の確保です。工学部にあれば、入学試験科目に数学と理科 (物理または化学) を課している現状を変えることが困難です。大学進学を考える高校生は、どうやら 2 年生になると、文系クラスと理系クラスに分かれ、文系クラスの子が何かのきっかけで建築を志そうとしても、受験の敷居が高いと考えざるを得ないようです。高校の進路指導の実態にも、問題がありそうです。建築学部は、定員の多くは現状のような工学部的入試で採りつつ、一部を数学と理科を受けなくてもよい入試で採ることとしました。こうした決断の過程では、学内の様々な意見を克服し、受験界から様々な情報や意見をいただくなど、それなりのエネルギーを注いでいます。

入学後のカリキュラムについては、現在は、数学、物理、化学を必修としている一般教養教育の改変が、重要な課題です。これについては、一般教養サイドの理解と協力がえられないと、どうにもならないのです。数学、物理、化学のいずれも必修としている現状を若干緩和し、一般教養科目の履修を原則 1，2 学年としている現状を、高学年での履修が当たり前にしたのです

が、外からは、ささやかな改変に見えるかもしれません。

最大の課題は、当然ながら、建築学部の具体化です。工学院大学の建築関係学科は、現在、工学部第 1 部に建築学科（定員 17 0名）建築都市デザイン学科（定員 90 名）、工学部第 2 部に建築学科（定員 90 名）を設けています。これを母体として、第 2 部から定員を 40 名移し、2011 年度に、まちづくり学科（定員 80 名）建築学科（定員 120 名）建築デザイン学科（定員 100 名）の 3 学科からなる建築学部を設けることとなったのです。建築内の議論では、学科という枠組みをはずすことまで考えましたが、全学レベルの理解を得るのは困難でした。3つ目の学科をどうするかも、多くのエネルギーをかけて議論をしました。さまざまな可能性がある中で、本学建築系の実績や特徴を踏まえ、まちづくり学科になんとか落ち着きました。

建築学部では、1 級建築士の受験資格に必要な科目を早期に履修させ、高学年では、多様な専門科目を選択できる、という教育システムを構築し、様々な課題の克服に臨んでいます。まずは受験生確保、やがては卒業生の社会への送り出しが待っています。これらをよりよい形で実らせるべく、総力戦で取り組んでいます。状況は厳しく、楽観は許されませんが、建築学部の成功は、工学院大学建築系にとって重要な課題であるだけでなく、苦境のさなかにある日本の建築界を元気づけることができるものと、私は考えています。

同じ時期に、関西では近畿大学に建築学部が開設されます。建築学部の創設が、工学院大学の独り善がりでないことの証と見ることもできます。日本初の建築学部への、多くの方々のご支援を切に願うばかりです。工学部から独立し、建築学部になることによって、様々な可能性が開けるとともに、現実には具体的な体制を形作らねばなりません。今後の建築学部の展開にどうぞ関心を寄せていただき、忌憚のないご意見を寄せていただくこともありがたいことだと考えています。

ところで、工学院大学では、広く各大学に求められている社会貢献活動として、エクステンションセンターという部署を設け、各種の公開講座などを行っています。建築関係では、「 学びなおしの住宅リフォーム 」「新都心の地域減災セミナー 」は受講者が多く好評をいただいていますし、ただいま「世界の台所」「フランク・ロイド・ライト」ほかの講座が開かれていています。建築以外の分野でも多彩な講座が用意されています。「鉄道」「宇宙」をテーマとする講座は人気があるようです。建築関係のこれまでの講座の中では、工学院大学にある「今和次郎コレクション」の公開を兼ねた講座が大変好評でした。こうした公開講座の中には無料のものもあります。夕方、ワインをいただきながら、その道の第一人者の話を聞く「サイエンスカフェ」という講座を随時開催しています。エクステンションセンターの特徴の一つが「孔子学院」です。孔子学院は、中国政府が直接支援する、中国語の教育機関で、近辺では、早稲田大学と桜美林大学に設けられています。

以上のほかにも、エクステンションセンターでは、各種の活動を行っています。工学院大学の立地や人脈を生かしたこうした活動は、今日、大学に要請される社会貢献として、一層重要性が高まると考えています。より大勢の方に関心を持っていただけるよう努めているところです。

建築学部のイメージ (工学院大学 HP より）

サイエンスカフェ風景（2010 年 8 月）